

北海道大野記念

# 分岐部脳動脈瘤に新デバイス

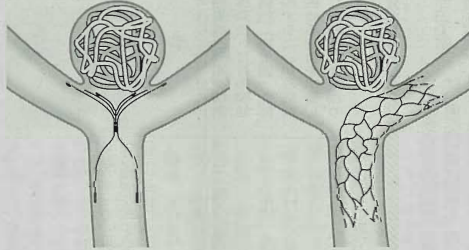
## パルスライダーを導入

西医の北海道大野記念病院(富樫孝次理事長、入江伸治院長・76床)は、脳動脈瘤治療の新デバイスである「パルスライダー」を導入。これまで難しかった、分岐部脳動脈瘤の治療の選択肢の一つとして活用していく。

脳動脈瘤コイル塞栓術しやすいが、脳部の動脈瘤は、T字分岐して脈瘤を詰めることで、内部にある部分に動脈瘤が生じて血行を促し、動脈瘤をとが少なくない。動脈瘤を詰める治療、直線的な動脈に生じた動脈瘤は、血管化するまでのコイルとコイルを詰めて固定の固定が難しいことが

から、通常はステントを留る。血流を妨げないデバイスで、使用している金製の片方の血管しか保護層が従来のステントとできないが、血管の形に比べて少ないため、抗血小板薬の服用期間が短く済むメリットもある。導入したパルスライダーは、カテーテルから展開した後、T字様の形状となりコイルを固定する位置、向き、展開状態が

# Hospital & Clinic



従来ステント

パルスライダー

従来のステントと比較し、コイルをしっかり固定できる。

確認しやすい。また、デバイスを通す際のデバイス操作を妨げないという特徴がある。非常に安全に、対する工夫が施されている。片岡丈人脳神経外科統括診療部長・脳血内治療センター長は、「これまで困難だった症例に対して、コイル塞栓術が可能になる意義は大きい。抗血栓薬の使用も大幅に短縮できるので、患者の負担軽減にもつながると話す。」

一方、事前に動脈瘤や血管の状況把握する必要があるほか、術中も治療に注意し、さまざまな緊急事態にも適切に対応できる体制が求められる。片岡統括診療部長は「経験豊富なスタッフが、CTや造影剤を準備して、積極的に」

「経験豊富なスタッフが、CTや造影剤を準備して、積極的に」

透視下でしっかりと状況を把握しなければならず、血管の形状などに合わせて、コイルを詰めるのに技術と経験を要するほか、血管の走行や動脈瘤のネック部分の形状などで、新デバイスを用いても施術が難しいことも少なくないという。

同病院では、脳動脈瘤治療において、フローアパーチャーシステムを今に細かな縫い目が入ったステントを使用する網目が大福に減し、内部に溜まった血液の血行が促して閉鎖する成を促して閉鎖するもので、コイルを詰める作業が減るが、治療時間が短くなる。

フローアパーチャーシステム、パルスライダーとともに、安全を進められた治療を継続し、さまざまな緊急事態にも適切に対応できる体制が求められる。片岡統括診療部長は「経験豊富なスタッフが、CTや造影剤を準備して、積極的に」